

鯉淵同窓会兵庫県支部だより(第15号)

新生学園にご支援を!

この度は、貴支部の種々な活動に接し、深く敬意を表する次第です。

私は第22期卒で山形県出身です。昭和42年に茨城県庁に入庁、普及員として20年、その後農政事務に17年、県庁退職後は茨城県フラワーパークに3年、八千代町ふるさと公社に7年、その後、八千代夢ワイン株式会社を立ち上げ、代表として今日に至っております。

昨年の総会で同窓会長に就任いたしました、力不足で大変恐縮に存じます。先輩をはじめ同窓生の皆様のご協力により、新生鯉淵学園の「これからの70年をめざして」を旗印に学園と一体となって、頑張りますので、特に兵庫県支部の皆様のご協力をお願い申し上げます。

ご承知のとおり、イセ食品を主体に学園は産学連携の新しい鯉淵学園として再出発いたしました。その結果、徐々に経営は若干、安定しましたが、学園運営のあり方等、多くの課題を抱えております。一番大きな課題は、魅力ある教育目標の基に学生募集をいかに進めるかであります。

海外からの留学生を安定的に受け入れることは重要ですが、国内の農業や食品栄養産業を支える学生をどう確保するかが大きな課題です。鯉淵学園の経営を安定させ、魅力ある学園にするためには、アグリビジネス科と食品栄養科の学生を毎年70人前後確保する必要があります。このことが学園経営のベース力となりますので、学生募集にご協力をお願いいたします。

学園にお願いしていることは、全ての教職員が学生と向き合い接点を持つことが大切であること。さらには、教職員をしっかりと育てる姿勢を持つこと、素晴らしい先生には素晴らしい学生が集まる。幸いにして、しっかりとした教育理念をもったイセたまご研究所長の島崎弘幸先生が学園長に就任しました。着任以来、老木の桜、並木の植え替えにとりかかり、種々な改革に同窓会と一体となって取り組んでいます。特に学園長は同窓会に理解が深く、次の70年を目指して一致協力をして、学園の建て直しに取り組んでいこうとし

ております。同窓会も立ち位置をしっかりと持って是々非々で全面協力をしていく所存です。

兵庫県支部の皆さん、鯉淵学園は経営難、衰退の20年から脱出して新生学園に生まれ変わろうとしております。皆様一人一人の温かいお力添えをよろしくお願い申し上げます。

鯉淵学園同窓会会長

西村 勝夫(22期卒 茨城県)

特集企画

「加藤 整先輩を偲ぶ」

編集者から兵庫県の同窓生の皆さんに、ご報告とお詫びをしなければなりません。10期卒の加藤 整さんが昨年の7月7日にご逝去されました。この訃報を同窓生の皆さんに、早くお伝えしなければならなかったのですが、既に第14号の兵庫県支部だよりを7月1日に発行しておりました。次の第15号支部だよりで訃報をお伝えする計画でしたが、実は私ごとで大変恐縮ですが、野菜を栽培しながら、町区長や地域団体の代表者などを数多く兼ね、日々多忙でありましたので、予定どおり支部だよりを発行することができませんでした。このたび、事業年度が終わり若干余裕もできましたので、第15号の発行にとりかかることができました。今回の支部だよりは、加藤先輩を偲んで、追悼の意味を込めて、加藤先輩の特集を組みました。寄稿いただきました同窓生の皆さんには心よりお礼を申し上げます。

加藤君との思い出

加藤君とは、昭和26年豊岡農業高校の同期生で、彼は時間があれば図書館で過ごしていたかなりの読書家だったという記憶があります。2年生になると養賢堂発行の月刊誌「農業及び園芸」を読み、知識を深めていたようでした。部活動は野球部に入り捕手をやっていました。夏休みには、農業試験場に行き勉強するなど非常に研究熱心でした。

学生時代の過ごし方は、以前にこの支部だよりで掲載されていたように、教授とは親しい関係を保ち、幅広い学問に染まっていたようでした。彼の故郷である豊岡市出石町の実家にも訪れましたが、何分読書好きらしく本棚には数千冊の本がぎっしりと並んでいました。

学園を卒業後、彼は兵庫県農協中央会に、私は地元の農業共済組合に就職し、互いに歩む道は異なりましたが、学生時代には切磋琢磨した良き友でした。

人生 100 年と言われる今の時代に、彼は早くしてあの世に逝き、本当に残念なことです。これも世の常であると思わざるをえません。

奥田 和夫 (10 期卒)

加藤先輩を偲んで

始めに、加藤先輩のご冥福を心から祈念申し上げます。私が加藤先輩と初めて出会ったのは、昭和 29 年 4 月、鯉淵学園に入学した時です。私は東寮の 14 号室、先輩は 15 号室で板壁を挟んで背中合わせの部屋でした。加藤先輩は兵庫県北部、私は京都府北部の出身なので、すぐに親しくして頂きました。加藤先輩は、勉強家で毎夜遅くまで予習、復習をされて夜 12 時を過ぎても灯りが消えることはなく、時には「公庄さん、もう休みましょうか」と声を掛けて頂くこともありました。数ヶ月続いたある日、部屋を替われ、以後私には遠い、高い存在でした。卒業後は、お互い遠い存在になりました。先輩は、私と同期の塚本定子さんと結婚され、加古川市にお住まいでした。1994 年に自費出版された「虹」を送って頂きました。以後定子さんとの関係もあり、16 冊の出版書を送って頂き、良き私の生き方の指針として参考にさせて頂きました。数年前に木津川市へ引越され、これからは時々お会いし、語り合えると楽しみにしていた矢先に、定子さんから訃報を聞き動転致しました。今は先輩から頂いた書物を読み返して、私の余生の励みにさせて頂いています。

大阪府高槻市 公庄 達一 (11 期卒)



哀悼 加藤 整 様

令和元年 11 月に、加藤 整氏が 7 月 7 日に急逝されたとの訃報を、奥様の定子様よりいただき、余りの突然のことに言葉に窮しました。皆様御存知のように鯉淵学園の歴史には一番詳しく、そして深く心から学園に思いを致しておられた方です。学園関係の著書を沢山出しておられますが、その成り立ちまでには、自分の足を使って、実にまめに誠実に事実を追求されていました。

入院されていた病室の机上には、「協同組合関係」の原稿の下書きがあったと言う事です。心残りがあったのではと残念でなりません。もっともっと、活躍して欲しかったです。

先輩は 2 期上でした。学園では来賓宿舎での読書会で、御一緒させていただきました。読書会は、藤岡孟彦先生（高村光太郎氏の弟）の御指導のもと「自由と規律」、「学問のすすめ」他、色々と学びました。又、このメンバーで、鎌倉で行われた智恵子抄展や、栃木の益子焼の竈場へも連れて行っていただきました。夏休みには、故小出学園長先生の膨大な図書のを整理をさせていただきました。卒園後も文通にて、何かと教えていただきました。学園創立 70 周年式典で奥様と共にお会いしたのが最後となりました。本当に残念です。ありがとうございました。心より御冥福をお祈り致します。 合掌 普光江文江 (12 期卒)

加藤先輩お世話になりました

出石の学校を出て、鯉淵学園から農協中央会に奉職した経歴は先輩と全く一緒、教えに従って勉強し、何か一つでもお返ししなければと思いつつ、何もできずにもう会えなくなってしまいました。

職場では、色々細かい指示をもらうのでもなく、好きなように仕事をさせていただいたこと、本当に幸せでした。

同郷の誼もあって、若い頃、時々明舞団地のお宅へ泊めてもらうことがありました。その節には仕事の話はなく、クラシック音楽のことや夏目漱石の本棚のことでした。

ステレオの左から流れ出る第一バイオリンの音と右からの第二バイオリンの聞き分け、漱石の本も全集が 3 種ぐらい並んでいたと思います。人

間生きていく上での「幅」みたいなものを手ほどきされました。加藤さん本当に有り難うございました。
柴垣 仁司 (19期卒)

加藤 整先輩との思い出

加藤先輩は、隣町豊岡市出石町のお生まれで、私の12年先輩に当たられます。先輩とは、20年程前になりますが、小出学園長の出身地、ご生家を一緒にお訪ねしたことがあります。このご縁の所以は、以下であります。

先輩の著書に「小出満二」があります。従って、日本農業を牽引された小出学園長のご生家及びご家族の歴史にも詳しく、小出学園長のご長女（東京生まれで当時独協大学教授）が、父君の生家を知らないから、そのご案内をと、近隣に住む私共に仰せつかったのです。ご一緒に同道する中で、先輩の農業振興への思い、また勉学の意欲等拝聴し、著書「小出満二」を編纂された意味が少なからず理解できる思いがした事も懐かしい思い出です。
高木 経吉 (22期卒)



加藤 整さんを偲んで

私がこの舞子に移転した昭和59年頃に、加藤先輩が明舞団地に居住されており、お互いに住居が近くでもありました。そのため、先輩の家に招かれて、一日かがりですチールの組み立て本箱を作り上げた記憶があります。その時は書物の多さにびっくりし、先輩のすごさを知ったという印象でした。

その後、先輩とのお付き合いが始まり、よく住吉達男さん(17期卒)に同行して、兵庫県人の何人かで幾度となく集いをしていたという記憶があります。また、先輩を交えて魚住の兵庫県農協中央会研修所で会合を開き、昭和61年5月24日施行の兵庫県支部規約を作り上げました。

先輩は、同窓生の先頭に立ち兵庫県支部の発足に事務局を導いてくださり、私は初代支部長足立優さん(7期卒)の補佐として、副支部長の大役を仰せつかったのです。兵庫県支部が今日に至って編成されているのは、先輩の存在が大きかった

と言っても過言ではありません。

先輩を評して、奥様の加藤定子さん(11期卒)は曰く、“書物を愛し、読書を好み、時には執筆の人生”そのものの人物であったと。私も奥さんと同じくそのような人物だったと強く思います。

田中 義治 (23期卒)

大変お世話になりました

鯉淵学園卒業後、いったん故郷である滋賀県に帰り、2年ほど社会人生活を送っていました。その後、豊岡に来ることになったのですが、仕事を見つけなくてはなりません。その時にお世話になったのが加藤 整さんです。いくつかご紹介いただいた中で、鯉淵学園(農業科畜産コース)での学びが生かせる城崎出石畜産農業協同組合連合会に入職させていただき、約10年間勤務させていただきました。ただ、私の個人的な理由で退職してしまったことを申し訳なく思っています。

それ以降、鯉淵学園兵庫県人会でお会いし、学園の動きや先生の話をお聞きすることぐらいでしたが、2017年10月の豊岡市議会議員選挙に立候補することの報告にお伺いした際には大変喜んでいただき、「友人・知人に手紙を出し、支援していただくようお願いしておきます。」と言っていたこと、今でも嬉しくありがたく思っています。
岡本 昭治 (31期卒)



編集者から加藤 整さんの奥様の定子さんに第15号の支部だよりに亡き「加藤先輩を偲ぶ特集」を組みたいとの意向をお伝えすると、奥様から編集者に対しての御礼の手紙とご夫婦で親交のありました「鞍田先生とのエピソード」を書いて送っていただきました。衷心より厚くお礼申し上げます。

鞍田先生とのエピソード

私共の結婚式は、出石町袴狭の新設した村の公民館で、昭和37年4月、会費100円を頂いての異例の形で開催いたしました。鯉淵の地から当時、

非常にご多忙だった鞍田先生が早朝「豊岡駅」着の急行「出雲号」でお越しいただき、お出迎えは生涯の友人だった山田昭二さん(後に県農協中央会専務)に担当して頂きました。当時の兵庫県農協中央会教育課長五百蔵さんが、県主催の講演会に鞍田先生をお願いしてもお越しただけなのに、幸せなことだと言われていたことを思い出します。「不肖の教え子よ、これから力を合わせてちゃんとした家庭を築くのだよ」と言う先生の深い思いやりを感じ、今後泣きごとは言えないなと強く思ったものでした。

披露宴の最後は、先生を真ん中に着物姿の花嫁も立って、「寮歌」を大勢の出席者の前で披露致しました。さしておかしなことも思わなかったのは、あの時代の雰囲気のおかげか、若さのなせることだったのかと、思い返してみると不思議です。茨城の片田舎から両親、叔父、兄等もはるばる山陰の地まで参りましての結婚式は、私にとりまして思い出深い出来事でありました。

村の方々にも多数ご出席いただいて、このような形で式ができた大きな力の一つは、生涯百姓だった(本人の弁)義父の存在があったと思います。頑固一徹の面を持ちながら、進取の気性に富み、村の人々の信頼も厚かったので、あの人が行うことならと周りが納得してくれたように思います。

加藤は、県農協中央会に勤務した事もあり、先生には直接又は著書で永い間、ご指導いただきました。農協、生協に強い関心を持ち、生涯ぶれる事なく仕事を全うできたのは、常に先生の指針があつてのことで、文通は先生の亡くなられた年まで続きました。

結婚して五十年余、私の病気入院、両親の介護等々、大なり小なり支え合って乗り越え、生活を共にしてきたと思っておりましたが、今日一人残されて、夫あつての私であつたと痛感いたします。

下書きの終了した原稿が机上に残っておりましたので、心残りもあつたかと思いますが、何も言い残すことなく、静かに帰らぬ世界に旅立ちました。皆様には、永い間、お世話になりありがとうございました。

尊敬する師・先輩、多くの友人、全国各地の研究者の方々や知人からたくさんの事を授けて頂き、育てられ、見聞を広められた充実した一生であつたと思います。

そのうえで故人の一生を顧みますと、書物を愛し、収集し、寸暇を惜しんで読書に集中していた姿です。一時一万冊に及んだ蔵書は、その散逸を心配して、本人が分類して各所(鯉淵学園・COOPこうべ図書館、村の公民館)にほぼ寄贈いたしました。手元に残した約800冊の本や資料は(例えば明治41年刊「農業要覧」和綴じB6判34頁。明・44年刊「兵庫県産業組合一覧」A5判51頁等)貴重と思われるものもあるようなので、目下少しずつ整理に当たっております。入院先の病室にも、協同組合関係の近刊3冊・漱石の「草枕」を持ち込んで目を通しておりました。最後まで本を愛し、時々執筆にも取り組んだ日々は、総じて平穏な晩年の明け暮れだったと思われまます。永い間「兵庫県支部だより」に原稿を掲載して頂いたことに、故人共々心より感謝いたします。

加藤 定子 (11期卒)

兵庫県支部だよりに寄稿いただいた

加藤 整先輩の「学園の思い出」一覧

- | | |
|------|------------------|
| 第2号 | 小出・鞍田両学園長のこと |
| 第3号 | 藤岡・石橋先生のこと |
| 第4号 | 宮島先生と早川先生のこと |
| 第5号 | 鞍田先生と農民作家丸山義二のこと |
| 第6号 | 小出先生の“小伝”について |
| 第7号 | 小出満二先生の「小伝」を上梓して |
| 第8号 | 昭和30年代同窓会の思い出 |
| 第9号 | 村上利夫さんのこと |
| 第10号 | 鞍田 純先生の思い出 |
| 第11号 | 学園の全寮生活で得たもの |
| 第12号 | 舟木開拓のこと |
| 第13号 | 月刊誌「村」の発刊 |
| 第14号 | お互いの“絆”を大切にしよう |

訃報

豊岡市出石町にお住まいの柴垣仁司さん(20期卒)が5月25日にご逝去されました。なお、生前中には加藤先輩との思い出を寄稿していただきました。慎んで柴垣さんのご冥福をお祈りいたします。

発行・編集者

兵庫県同窓会支部長 福井寛行(26期卒)